

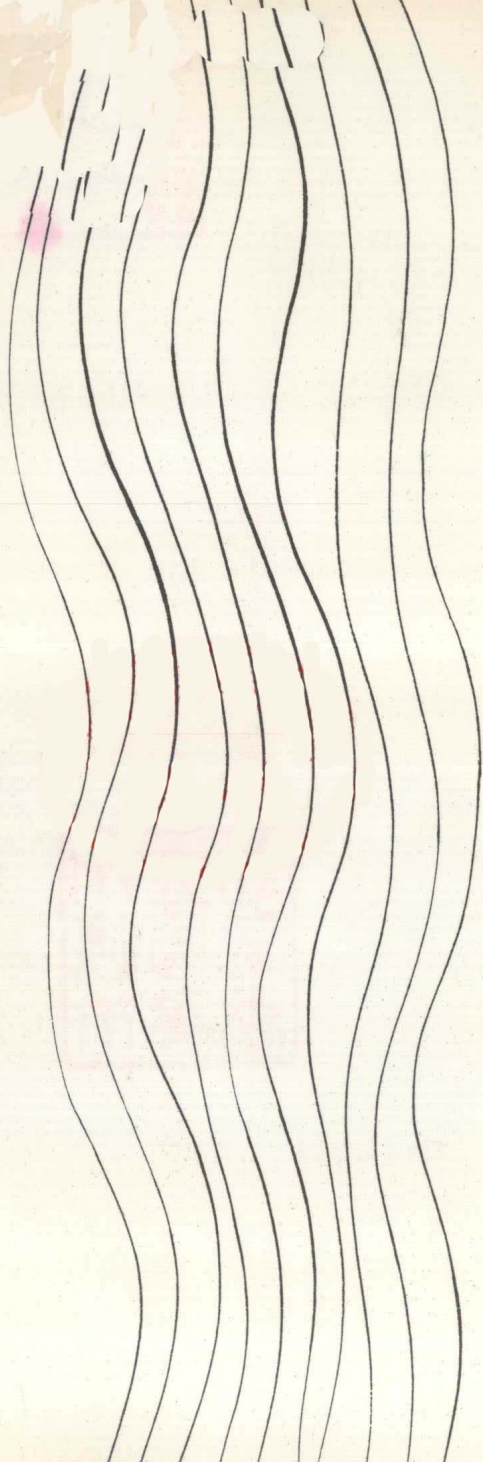
みづからみ

上巻
茂木草介

アザミガミ 上巻

茂本草介

東京文芸社



みだれがみ(上巻) 三九〇円

昭和四十二年九月二十日印刷
昭和四十二年九月二十五日発行

著作者 茂木草介 ©
発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(三〇)二五五〇

まえがき

昨年中、大褒好評だった「横堀川」の後を受けて、同じ茂木先生の台本で「みだれがみ」を始めたいと、大阪NHKより申出があった時は主人公、鳳志よしの長子に当る私の夫、光やその他の子供達も一沫の不安を感じていました。確かに義父母は歌人として勝れ、その生涯も平坦とは云い切れぬものがありました。果して多くの一般人が視て面白いものになるのだろうかと思案じられたのです。それにテレビの影響力は想像以上に大きなものです。今尚、その作品のみより推察されている、義父母の愛情の成立ちにも、不確実な説が取り上げられています。折里から、私はその死の間際まで、二人の潔白を信じ、そうした説に抗しながら、死んで行った、小林天眠の三女として義父母を理想化すると云う意味でなく、事実であるかないか、今はもう確かめようのない、それ故、臆測のみによることを、事実とされるのを非常に恐れまして、未知の茂木先生に非礼をも省みず実姉、安也子と手紙を出したのです。処が、思いがけず先生よりお返事が来ましたが、それは実に素晴らしいものでありました。

先生はこの作は過去に実存した、万人憧れの晶子の実績を曲げることはしないが、あく

まで創作的フィクションであるとお断りがあり、事実を書くのではなく、晶子の真実を書きたく思っているので、残念にも生前の、晶子に会う機なく、美しい夢の中の晶子像を手探りで書いているような訳だが、私共の真情を思い、私達の関心事はもとより他のことも筆のすべらぬよう注意するとまでの、誠意あふれる謙虚なお手紙に心を打たれ、安心と同時に感謝の念を深く致しました。

義母は女らしい一面厳しく清らかな人柄でしたから、どのように激しく唱われた愛の短歌でも、その字面の官能的表現の解釈からだけでは、本当の義母の詩魂に触れることは出来ないと信じます。その点、天才のみの味わう孤独の哀感をいつも身にしみて、感じていた人ではないのでしょうか。このような非凡な感受性に恵まれてこの世に生を受けた一少女が一地方の平凡な商家で、どのように感じ考えながら、育って行ったかを、先生はオリジナルな映像として描き、一庶民の中よりも生れる純粹芸術の開花の可能性をお示しになりたかったと云う事を、つぎつぎにNHKより送られて来る台本で知り、先生御自身の暖かな人間愛と人生観に幾度胸をつまらせたり、又、ある時は思わず共感の思いに充たされたかわかりません。晶子に無関係な視聴者にもそれは感じられ、思わず惹かれて行ったことでしょう。歌を所々に挿入され、素人の私共も自然に歌を味わうことが出来ました。今までの真正面から、歌に取り組んだやり方でなく、おや、このような歌がと思われるものが、ピタリとした画面に現われるのには敬服致しました。歌を理解しにくい頭でも画面か

らは六つかしい説明なしに、耳より目より自然におぼろげながらも分るような気がして楽しめました。

私が義父母を実家の父の敬愛する友人達として、与謝野の小父様、小母様と意識し出したのは小学四年、大正四年位からではないかと思ひます。その時分の義母は、幼い私にも秀でた叡知により磨き出された美しい女人に写りました。殊に、その黒耀石のように輝いた目が大きな庇し髪の下で、考へる心を湛えた湖のように澄んでいて、その目で見られると子供心にもうつとりとして、少し体も心も震えるような気がしたことをも印象深く思ひ出します。以来、その聡明で優雅な天才歌人を義母とよぶなど夢にも思はず、かなりの年月が嫁ぐまで続きました。

今夏も私共は例年通り、また輕井沢三笠の天眠荘なる古い山荘に来ております。この山荘から堀を距てて、見えかくれする別荘に、私の結婚した昭和三年頃、与謝野一家は縁続きの山本家の厚意で、一夏を過したことがありました。

輕井沢三笠の莊の借り家のまろ木の欄の濡る秋かな

と義母の唱っている別荘らしいのです。そして、七月十七日にこちらで見ました「みだれがみ」には、実父、小林天眠も出て来まして、光と感無量で自分らの親達の面姿を見な

がら、この茂木先生の手になる晶子像「みだれがみ」がテレビの一瞬の幻影として消え去ることを惜しましました。この度、茂木先生の「みだれがみ」として上梓されると聞き、喜びに耐えません。

先生はじめ出版社に心より感謝いたします。

七月廿七日

軽井沢三笠天眠荘にて

与謝野迪子

みだれがみ

上卷

題 裝
字 幀

広 中
津 尾

雲

仙 進

第一章

1

大阪の南に接し、大阪湾に臨んだ堺は、遠く室町時代から貿易港として栄え、江戸中期以後にもまだ豪商軒をつらねた都市だったという。堺は自由都市として発達した。

明治に入ると、土地の変動から港が浅瀬になり、良港としての機能を失ったために、繁栄を大阪神戸に奪われはしたが、それでもまだ堺は昔を偲ばせる古風なおつとりと落着いた町であった。

その堺の大通、甲斐町の角に、紺の日除暖簾に揚羽の蝶を白抜きで染め出した和泉堂という菓子店があった。天保の頃、堺に近い鳳村の人鳳氏が創始した店で、明治に入ってから三代目の代になっているが、和泉堂は大阪までも聞えた看板であった。

明治の歌壇に新風を吹き込み、一世に令名を馳せた与謝野晶子は、この和泉堂に当主宗伍を父として生れた。与謝野姓は後に与謝野寛と結婚してからのもので、生れ落ちての名は鳳しょう、人々はしょうとはんと愛称した。しょう嬢はんの意味である。

鳳さん ほったか ほう十郎

ほりきんの　ほんぶくろ

鳳さん　羊かんもつといで

遊んでやるから持つといで

近所の子供たちはそんな歌をうたつてしょう子をからかった。

しょう子の幼い頃の記憶で、後々まで胸に痛みを残したのは、姉のかな子の嫁入りであった。かな子に嫁入り話が起っているのは、家族の者や奉公人の話の聞きかじりで、しょう子もうすうす知つてはいたが、女が他家へ嫁すということがどういふことなのか、もとよりわかる筈がない。ただ、ふだんから口数の少い姉が日ましに一層無口になり、時には独りひっそりと涙ぐんですわつていたりするのを、不思議に思ふばかりであつた。

堺の夏は湿気が多く暑い。その日はまさに取り分け暑い日だったが、

「今日はかな子の仲人はんが来やはるさかい、おとなしうしとるんやで」

母のみねにそういわれて、しょう子はよそ行きの着物に着替えさせられた。

宗伍もみねもこの日は紋服に姿をあらため、家中が朝からざわついていた。

やがて店の前に二台の俵が着き、仲人夫婦が下り立った。

宗伍の案内で二人が奥座敷へ通ると、今日はまたいつもより沈んで見えるかな子が、そのあとから座敷へ入った。

しょう子が廊下から隙見していると、客とむかいあつて宗伍とかな子は正座した。

そこへ母のみねが上女中のお福を従え、茶を持って入つて来た。

「お福茶でござります」

みねがすすめた茶を、仲人夫婦は会釈して一口飲み、男の方が口を切った。

「ご挨拶を申しあげます。この度は木田様とのご縁がまとまりまして、まことにおめでとう存じます。さて、本日はお日柄もまことにおよろしいようで、今朝早く木田様からお結納をお預りいたしてまいりました。どうぞ、幾久しくお納めをいただきとう存じまする」

宗伍がそれに答えて、

「これはごていねいなご挨拶で恐れ入りました。此処に控えます本人、手前どもの娘かなはまことにふつつかな者ではござりまするが、あなた様方ご夫婦のお仲人をいただきまして、これ以上はない三国一のお婿様とよいご縁がまとまりましたことは、心からありがたく存じまする。それでは結構なご結納、幾久しくお受けをいたしまする」

鹿爪らしい大人たちの応対が、芝居でも見ているようにしよう子には物珍しかった。

仲人の女の方は俵を下りた時から捧げ持っていた品物から、風呂敷を取り去り、それを男の人がかな子の前へ置いた。

すると、宗伍はそれをうやうやしく持つて床の間へ飾った。結納の祝い台である。

「それではどうぞお改めを」

女の方がいうと、今度はかな子が立つて、祝い台を自分の前に持ちもどった。

「お祝い台の右から申しあげます」

女の方がはじめて口をひらいて、

「長のし、目録、目録には只今申しあげます品書きがござります。はじめはおん帶地料一封、次、順順に、勝男節一連、寿留女一連、子生婦一連、友白髪一基、末広一對、家内寿留女一荷でござります。右の通り幾久しくめでたにお納め下されますよう」

そこまでのぞき見していたし、その時いきなり声をかけられた。

「しょうとはん！」

店の番頭の大助であつた。

しょう子はペロリと舌を出し、バタバタと廊下を逃げ出した。

走りながら思った。女のお嫁入りとはいったいどういうことなのだろう。女と生れたからは誰でもお嫁入りをしなければならないのだろうか。

2

暦の上の夏が過ぎると、堺の町もさすがに朝夕はしのぎよくなり、葛城^{かつらぎ}や高間の山が近く見えるようになった。

和泉堂のある甲斐町から海岸までは一キロばかりの距離があつて、しょう子は夏の間中よくそこへ遊びに行った。そこには海に突き出たお台場があり、子供たちのかっこうの遊び場になっていた。

しょう子は宿院小学校の生徒だったので、長い夏休みが終ると、まっ黒に陽焼けした健康な顔で学校へ通いはじめた。

或る日、しょう子は学校から帰ると、父の宗伍に居間へ呼ばれた。

「あんたな……」

宗伍は薄笑いをふくみながら、しょう子を迎えた。

「へえ」

しょう子が怪訝の面持でかきこまると、宗伍は和本の入っている本箱を引き寄せ、ふたを払って中

の本を取り出しながら、

「ほれ、本の順序が入れ替つてますやろ」

「……」

「あんたやろ」

「へえ」

しょう子は首をすくめた。

「しょうがない子やで、ほんまに。けど、こんな本読んでわかりますのんか」

宗伍はしょう子の盗み読みをとがめるつもりはなく、しょう子が果して源氏物語だとか大鏡だとか栄華物語だとかを解説出来るのかと不審に思っていたらしい。

「はつきりわかれしまへん。けど、十ペンも二十ペンも読んだらわかる思いますねん」

「そらまアそやけど……」

宗伍はうなずいて、しょう子へまっすぐ眼をむけ、

「あんたなア、井口先生とこい行きなはるか」

「井口先生で、どこの先生だす」

「漢学の先生や」

「カンガク？」

「つまり漢文だす。子^しのたまわく、というあれだす」

「なんでだす？」

「あんた本読むのん好きやさかい。本読むには基礎をこしらえないしまへん。それには漢文を勉強するのがよろしい」

「学校から帰ってから、踊りやらお茶やらいっぱいせんりまへん」

しょう子はむずかしい漢字ばかり並んだ漢文を、あまり好きになれそうもなかった。

「それはそれ、これはこれだす」

宗伍は意外に強硬である。

しょう子が返事に迷っていると、お福が茶を持って入って来た。

「お帰りやす」

「な、お福どん」

宗伍はそう声をかけてから再びしょう子へ、

「あんたな、四つの年に小学校へ行つたンおぼえてなはるか」

しょう子はたしかな記憶がないので首をひねった。

「おぼえてないかいな、二日だけしか行かなんださかい」

するとお福が口を出して、

「へえ、三日目に泣いて暴れて帰って来やりましたンだす」

と忍び笑いをした。

そういうわれれば、おぼろに夢の中のことのように、しょう子もそんなことがあったような気がする。

「小学校は六つが明けてから入るのやけど、実力さえあつたら四つからでも入れましたンや。まアそんなことやさかい、踊りやお茶と一緒に、いそがしいても漢文の塾へ通うぐらいのことは出来ると思いますねン」

「ほな、漢文いやになつたらまた暴れて帰って来てもよろしよますか」

しょう子は口をとがらせた。

「ははは、無茶なこといいはんな」

「今のしょうとはんなら大丈夫でおまつしやるな」

お福は余計なことをいう。

「勉強は出来るだけ小さい時にやっという方がええさかいな」

宗伍にはいい出したらあとへひかない片意地なところがある。

しょう子も観念しない訳にはいかなかった。

宗伍は菓子屋の主人に似合わず学問好きで、店の帳場はかな子と番頭にまかせ、ひまさえあれば居間にこもって、古い物語類を読みふけったり、発句をひねったり、時には画を描いたりしていた。こうした父を持ったことが、しょう子の後年に影響したといえないことはなかった。

それから数日後、しょう子は母につれられて井口塾へお目見得に行き、毎日通うようになった。しょう子は何故かこの頃気が重かった。よくよく考えてみると、姉の婚礼が日一日と近づいているからのものであった。

前にもこれと同じ気持を経験したことがある。家にいたシゲという女中が、花嫁にしては若過ぎる十五才で嫁入りした時であった。

シゲは堺から八里ばかりはなれた尾崎という海辺の漁師の娘で、父親が飲んだくれて暮しが苦しいため、小学校もろくに出ずに奉公に来ていた。

そのシゲに嫁入り話があるといつて、父親の源太郎が尾崎からやって来たのは、シゲがまだ十三の年の時であった。

「阿呆なこといいはんな、おシゲちゃんはまだ十三だっせ」

みねが呆れて見せると、

「いえ、今やおまへん。あと四五年、いや七年でも八年でも待つさかい話だけは決めてくれ、と先方がいいよりますねや」

と、源太郎はさすがにてれた顔でいった。

その頃しょう子は宿院小学の初等二年生であった。だいお後になつてわかつたことだが、源太郎はシゲを嫁に欲しいといった若者の家に借金があつて、その若者の愚鈍を知りながら、体のいい借金のカタにシゲを嫁に出すつもりになつていたらしい。

それから二年後の明治十九年に、大阪府下一帯にコレラが蔓延したことがあつた。府下の死者一万九千七百人を数えたというから、堺でも飲食関係の店は火の消えたようになり、和泉堂もしばらく菓子製造を中止して店を閉めた。

シゲの祖母がやはりコレラで死んで、シゲは尾崎の家へ歸つて来ることになつた。
「用がすんだらじきに歸りまっさかい、おとなしいに待つてとく、なはれや」

シゲは出かける日、身仕度をしながらしょう子にそういつた。

シゲの家は鳳家の遠い親戚にあたるので、シゲは召使であると同時に、しょう子の仲のいい友達でもあつた。

しょう子はシゲを嫁に欲しがっている若者が、政太郎という名なのを知つていた。

「政やんでどんな人？」

と無邪気な声できいた。

「しょうとはん、政やんのこと知つたはりますのんか」

シゲはびつくりした顔をした。

「おとうさんとおかアさんが毎晩話したはるもん。……今夜帰つたら政やんに会ふのん？」